どんぐりのリボン

田辺聖子

講談

講談社文庫

常州大学図書館
藏書

聖（せいのり）

田辺聖子

講談社

|著者| 田辺聖子　1928年大阪府生まれ。樟蔭女子専門学校国文科卒。'64年『感傷旅行（センチメンタル・ジャーニィ）』で第50回芥川賞、'87年『花衣ぬぐやまつわる……』で第26回女流文学賞、'93年『ひねくれ一茶』で第27回吉川英治文学賞、'94年第42回菊池寛賞、'98年『道頓堀の雨に別れて以来なり』で第50回読売文学賞、第26回泉鏡花文学賞、第3回井原西鶴賞を受賞。'95年紫綬褒章、2000年文化功労者に選ばれ、'08年には文化勲章を受章。小説をはじめ古典や評伝、エッセイ等著書多数。'07年にはデザイナーの乃里子を主人公とした『言い寄る』『私的生活』『苺をつぶしながら』の三部作が新装版として復刊され、世代を超えて女性たちの支持を集めている。近著に『田辺聖子の古典まんだら』（新潮社）、『われにやさしき人多かりき』（集英社）、『一生、女の子』（講談社）など。

どんぐりのリボン
田辺聖子（たなべせいこ）
© Seiko Tanabe 2012
2012年2月15日第1刷発行
2013年5月7日第4刷発行

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277164-1

どんぐりのリボン　5
解説　柴崎友香　351

講談社文庫

どんぐりのリボン

田辺聖子

講談社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

どんぐりのリボン　5
解説　柴崎友香　351

どんぐりのリボン

1

それまで、私は、左手にいる直美や元子と夢中になって、花嫁の結美子のことをしゃべっていたから、右となりの男には関心を払わなかった。

テーブルには五人いた。私たち、新婦側の友人が女ばかり三人、新郎側の友人とおぼしい男二人、である。

結美子ははじめのウエディング・ドレスからすでに、高島田に大振袖のお色直しをすませている。新郎もそれにつれて、さっきのモーニングから、羽織袴になっている。

結美子の衣裳はグリーン地に、梅の花が大きく散っている、派手やかなものである。

「うーん、あの色でうまいこと、かくれてるなあ」

と山本直美が感に堪えたようにいった。

「四ヵ月とみえへん」

磯貝元子も、私たちだけに聞こえるようにつぶやく。

「着物はごまかしやすいのよね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「いまやからよかった。――もうちょっとあとだと、目立ってたかもね」
会場は誰かのスピーチが終って拍手の波である。正面、金屏風を背にして坐っている結美子はどっかと居直り（やや太り肉だから、どうしてもそうみえる）
（四ヵ月がどや、ちゅうねん。目立ってなにがいかんねん）
という感じで、幸福そうにフクフクと笑っていた。
いや、私たちもべつにそれを咎めだてしているわけではない、恋人の上原クンとうまいこと、結婚挙式にこぎつけた彼女の強運を、
（ヨカッタ、ヨカッタ！）
と祝福しているのだ。だからみんなと交す私語は好意にみちたからかいなのである。
結美子は小さい貿易会社に勤めているが、結婚しても働く、といっている。英文タイプや英語のできる彼女は、会社では重宝な存在だとみえて、次に立った上司が、
「結美子さんのように才能ある女性は、結婚されても、どうかご家庭に閉じこもられず、社会の第一線で活躍して下さるように、それがひいてはご家庭をあかるくたのしくされる要素ともなりましょうからその点、ぜひご主人のご理解ご協力を仰ぎたいものでございます」
と持ち上げたスピーチをしていた。

ふつうは、たいてい家庭に入って内助の功を、というスピーチが多いものなのに、貿易会社はやっぱりちょっと開けてるのんかいなあ、と私は思った。

思ったが、それは私の耳に快くひびいた。

私も、女は結婚してもやっぱり「第一線で活躍」すべきだと思っているからだ。

もっとも、それと、私が独身であることとは別だ。〈一生仕事をつづけますから、そのつもりでいて下さあい！〉と男たちに触れまわっているわけではないのに、私は二十五のいままで、ろくに縁がないのである。

それは私たちのグループもみなそうで、やっと結美子が、

「一、抜けた」

になったばかりである。

なぜか、私たちの世代、腰の重いのが多いように思う。いまの十代なんかすごいのだ。十七で結婚、十八で子供を産んで、十九で離婚し、親もとへ子供と共に戻って、昔にかえって遊び歩いてるというようなのもいるのにくらべ、二十代はつつましい。

これは元子の持論だけど、ヒドい十代と勝手な三十代にはさまれてるせい、というのだ。三十代は時代の混乱に加えて親の見識もないうちに、あれよあれよという間に子を産んで、その子がもう十代、だから十代がパッパラパーなのは（これも元子の口ぐせである）親の三十代がパッパラパーだからだそうである。はねっかえりの無茶苦

茶の、中身パッパラパーの三十代・十代にはさまれ、二十代はまわりに気兼ねして、迫力を失ってしまうのだそうな。元子は、その省察を、学童の父兄に接して得た、といっていた。

元子は小学校の先生である。

私は蛍川市（ほたるがわ）という、阪神間の小さい町の市役所に勤めている。直美は医療器具を扱う会社のＯＬである。三人とも、まだ当分、結婚するアテはないが、いつまでもヒドい十代と勝手な三十代にはさまれて、ひとりで圧迫に堪えているつもりはないのは無論である。

「では新郎のご友人、栗本健太（くりもとけんた）さん、どうぞ」

と司会者の声がして、ぬっと立ち上ったのは、私の右手の男であった。

同じテーブルについたからには、不愛想にならず挨拶すべきであったが、私は元子らとの私語にいそがしくて、その「栗本さん」とは口を利いていなかった。

彼は黒のスーツに身を固め、せい一ぱいのおめかし、という感じで、白銀色のネクタイを結んでいる。白いシャツのカラーは堅そうに太い首をしめつけ、苦しそうである。がっちりした体つき、胸幅もおなかの厚みもぱんぱんと張って、石を投げたら弾（はじ）き返しそうであった。

「いま、才能のある女性は、家庭に閉じこもられず、社会の第一線で活躍して下さる

ように、というお話でしたが、僕にはその言い草――」といいかけて、
「いや、そのお説は」
といい直したので、会場はどっときた。
百五十人ほどの客は、それをわざといった冗談だと思ったらしいけど、男はべつにそのつもりではなかったらしく、一瞬混乱して、
「うーん……いや、その」
とつまった。
野太い大きな声である。司会者に渡されたマイクでしゃべっているのであるが、たぶんマイクなしでも、きっとホールの中にひびきわたったにちがいない。いい声、というのではないが、遠くの野面（のづら）にまでひびいてしまう、あるいは工場の騒音に負けず、
（おーい、メシにしよかあ――）
と叫んだらそれが隅々までよく透（とお）りそうな、そんな声である。
「そのお説は、僕には疑問であります」
青年はやっと立ち直って、訥々（とつとつ）といっている。
「上原クンは、ですね、いまはサラリーマンですが、代々長くつづいた蒲鉾（かまぼこ）屋さんで、上原クンもやがては、長男ですから家業を継ぐように、僕は、聞いとります。

……うーん、その、そういうときに、女性が、いや奥さんが上原クンの家業をたすけて、一緒に働いてやって頂きたい、と思います。才能はそこへそそいでやって頂きたい。上原は（と、敬称略になってる）何も、才能もろたん、違う。ヨメもろたんや、思います。ヨメはん、ちょっとぐらいは英語しゃべれるかもしれん、英語読めるかもしれん、しやけど、それ置いといて――」

と青年は、目に見えない箱を脇にどけるようなしぐさを、マイクをもったままやってみせ、

「女房やったら、ウチへはいって上原たすけてやって下さい、上原が仕事しやすいように家を守って下さい、別々の仕事やってんのは、上原かわいそうです」

かんじんの上原新郎と、結美子新婦はこのとき、第二回目のお色直しとかで、嬉々と立ってゆき、せっかくこの青年が友人のために力説しているのに、場内はざわざわして、

「ナハハハ……」

というような、しまらない笑いがあちこちに洩れた。羽織袴の新郎は、お芝居の道行のように、高島田の新婦の手を脇へかいこんで六方を踏むように退場したからである。これも進行係の演出かもしれぬが、この頃の新郎新婦は、全然、恥ずかしがっていない。ただ演技力を発揮したいばかりのようである。

青年は汗を拭いて腰をおろした。

マイクが私にまわってきた。

「新婦のご友人、藤井五月さん、新婦とのおつきあいの中で、思い出のエピソードでもありましたらご披露を」

こういうこともあろうかと思い、私はしゃべることをあらかじめ用意していたが、さきの青年のコトバで急にむらむらと反撥をかきたてられた。

（才能もろたん違う、ヨメもろたんや）

とは何だ。なまいきな！

（女房やったら、ウチへはいって上原たすけてやって下さい、上原が仕事しやすいように家を守って下さい）

とは何だ。結美子の上司は五十年輩の男性だが、ちゃんと、才能ある女は結婚しても仕事をつづけよ、とすすめているのに、まだ二十代の（らしくみえる）若い青年が、「女は家を守れ」とは何という保守性、ド古い考えであろうかと思ったのだ。

私は立ってマイクを握り、

「いま、上原さまのお友達が、女は家を守り、夫の仕事をたすけよ、とおっしゃいましたが、夫も、妻の仕事をたすけ、共に充実した人生を送られるほうが、ずっとすばらしい結婚生活ではないかと思います。せっかくの結美子さんの才能を、あたら埋め

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com